

奄美・沖縄の言語研究から

ー奄美方言のエビデンシャルティー

木部 暢子 (国立国語研究所)

概要

与論方言では、話し手が直接見たり聞いたり感じたりしたことを報告するとき、そうでないことを報告するときとで異なる形式を使う。この2種類の形式は、情報のソースを表す *direct evidence* と *indirect evidence* の違いに当たると考えてよい。2種類の形式は、主語の人称にも対応しており、主語が一人称の場合、話し手が直接見たり聞いたりしたことを表す形式が使えない。形容詞述語の場合、2つの形式は *direct evidence* と *indirect evidence* を表すと同時に、一時的な状態と恒常的な状態といったリアリティの表現を表す。

奄美大島龍郷町瀬留方言でも動詞の非過去形に2種類の形式が使われる。これらはメノマエ性 (松本 1996) と名付けられているように、話し手が目撃しているデキゴトとそうでないデキゴトを表している。奄美大島名瀬方言にも2種類の終止形があるが、*-m* 形は客観的根拠のある事態に対する断定を、*-ŋ* 形は *mirativity* を表している。

アスペクト表現において～ヨル、～トルの対立をもつ北九州市方言では、～ヨル、～トルのアスペクトの対立がなくなった場合に～ヨルが *direct evidence* 的な意味を担うことがある。

古典語にも *direct evidence* 的な表現がある。推量の助動詞「なり」は実際何かの音が聞こえている表現、「めり」「らし」は視覚的、聴覚的な直接証拠に基づく推量の表現である。

キーワード

与論方言, 奄美方言, 九州方言, *direct evidence*, *indirect evidence*

1. はじめに

鹿児島県与論方言では、動詞・形容詞の終止形に2種類の形がある。『太郎は海へ行った』を与論方言で何と言いますかと質問すると、『行った』にはイキュータン (*ikjuutan*) とイジャン (*izan*) の2つがある。どんな場面ですか」という答えが返ってくる。「どう違うのですか」と質問すると、次のような違いがあると話者は説明してくれた。

- (1) タローヤ ウンカティ イキュータン。・・・話者が目撃したことを言う。
太郎 は 海 へ 行った (行きおった)。
- (2) タローヤ ウンカティ イジャン。・・・単に過去の事実を言う。
太郎 は 海 へ 行った。
- (3) ワナー ウンカティ イジャン。・・・話者の過去の体験の事実を言う。
私 は 海 へ 行った。
(菊秀史『与論の言葉で話そう2 動詞を覚えよう』:5)

話者が目撃したこととそうでないことの違いだとすると、イキュータンとイジャンの違いは、エビデンシャリティ（証拠性、証拠様態などと訳される）と呼ばれている現象にあたるのではないか。これが本稿の出発点である。（与論島の位置については、末尾の付録図を参照のこと）。

2. エビデンシャリティとは

エビデンシャリティとは何か。Alexandra Y. Aikhenvald (2003) は次のように述べている。

- (4) In a number of languages, the nature of the evidence on which a statement is based must be specified for every statement—whether the speaker saw it, or heard it, or inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else. This grammatical category, referring to an information source, is called ‘evidentiality’. (Aikhenvald 2003: 1)

また、工藤 (2004) には、次のように書かれている。

- (5) <証拠性(evidentiality)> : 話し手が伝える情報のソースを明示する文法的カテゴリー。direct evidence と indirect evidence がある。様々な言語で、<人称>と関連することや、パーフェクトからも発展することが指摘されている。(工藤 2004: 33)

与論方言のイキュータンとイジャンをこれに対応させてみると、イキュータン（話者が目撃したこと）は “the speaker saw it”, “direct evidence” に当たり、イジャン（単なる過去の事実）は “the speaker inferred it from indirect evidence, or learnt it from someone else”, “indirect evidence” に当たるように思われる。主語（動作主）が第一人称の場合にイジャン（単なる過去の事実）が使われるのは、話者は自分の動作を直接見ることができないので、「非目撃」 “indirect evidence” のカテゴリーに入るためである。

与論方言では、過去形だけでなく非過去形にも2種類の形がある。(6) は直接、太郎を見て発話している場合、(7) は過去の事実を述べる場合である。

- (6) 前方から太郎が歩いてくるのを見て

アッ アマカラ タローガ {キュイ/*キュン}。(*は非文を表す)

あつ 向こうから 太郎が 来る。(菊 2007: 4)

- (7) 五時に来ると行っていた太郎が七時にしか来なかったことを聞き手に話す場合

タローヤダー ゴジンヤ キュンチュタルムヌ シチジナティ キュン。

太郎は さあ 五時には 来ると言ったのに 七時になって 来おる。

(同: 152)

与論方言のエビデンシャリティと思えるような現象について、以下の節でもう少し詳しく見ていこう。

3. 与論方言のエビデンシャリティ

与論方言のエビデンシャリティについては、工藤（2014）に分析があるが、ここでは菊秀史氏の『与論の言葉（ユンヌフトゥバ）で話そう』の第2巻、第4巻を資料として、その特徴を考察する。『与論の言葉で話そう』は、文脈付きの用例が豊富に掲載されていて、与論方言を勉強するのに大変よいテキストである。第2巻が「動詞を覚えよう」（2007）、第4巻が「形容詞 助詞 表現意図」で、ここに動詞・形容詞の文例が数多く掲載されている。

3.1 過去表現に現れる2種類の形

与論方言では、過去表現に2種類の形が使われる。たとえば、「掃く」「買う」「間に合う」には (8) ポーキュータン／ポーチャン（掃いた）、(9) ヘータン／ホータン（買った）、(10) マニエータン／マニオータン（間に合った）の2つの形がある。前者は<話者が直接見たり聞いたり経験したりしたことの報告> (8a, 9a, 10a, 10d)、後者は<過去の客観的事実の報告> (8b, 9b, 10b) や<一人称主語の文> (8c, 9c, 10c) である。

- (8)a. ヤコー シカマ ヤンメー ポーキュータン。(話者が見たこと)
兄は 朝 庭 (を) 掃いた (掃きおった)。(菊 2007: 68)
- b. タローヤ シカマ ヤンメー ポーチャン。(過去の客観的事実)
太郎は 朝 庭 (を) 掃いた。(同: 67)
- c. ワナー シカマ ヤンメー ポーチャン。(一人称主語)
私は 朝 庭 (を) 掃いた。(同: 65)
- (9) a. タローヤ デパートノンティ スーツ ヘータン。(話者が見たこと)
太郎は デパートで スーツ (を) 買った (買いおった)。(同: 68)
- b. タローヤ フドゥ ミークン クルマ ホータン。(過去の客観的事実)
太郎は 去年 新しい 車 (を) 買った。(同: 67)
- c. 制服は ホータミー > ホータン。(一人称主語)
制服は 買ったか? > 買った。(同: 65)
- (10) a. 太郎ヤ 授業カチャー マニエータン。(話者が見たこと)
太郎は 授業までには 間に合った。(同: 69)
- b. (出発時刻ぎりぎりに間に合って) ユカテー マニオータン。(客観的事実)
よかった 間に合った。(同:139)
- c. ウロー 遅刻シランタミー。>授業カチャー マニオータン。(一人称主語)
君は 遅刻しなかったか。 授業までには 間に合った。(同: 66)
- d. ウロー 遅刻シランタミー。>授業ナンヤ マニエータン。(経験して分かった事実, 感覚)
君は 遅刻しなかったか。 授業には 間に合った。(同:138)

歴史的事実を報告するときには、直接見たり聞いたりしたことを報告する形が使えない。たとえば、聖徳太子が主語の (11) ではタテュータン（建てた）ではなくタティタンと言わなければならない。もし、タテュータンを使うと、建立されるのを見ていたことになる

という(菊 2007:69)。(12a)も聖徳太子が主語なのでイエータン(おっしやった)ではなくウワーチャンと言わなければならない。主語がフジョー(叔父)の場合、直接見たり聞いたりしたのであればイエータンが使える(12b)。

- (11) 法隆寺ヤ 聖徳太子ガ {*タテュータン/タティタン}。
 法隆寺は 聖徳太子が 建てた。(菊 2007: 67-69)
- (12) a. 聖徳太子ヤ 「和を以って尊しと為す」チチ {*イエータン/ウワーチャン}。
 聖徳太子は 「和を以って尊しと為す」と おっしやった。(同: 67, 69)
- b. フジョー アッチャー ワンヌ ウンカティ ソーユンチ イエータン。
 叔父は 明日 私を 海に 連れると おっしやった。
 (話者が直接聞いたこと)(同: 69)

以上のように、与論方言の2種類の過去表現は、どちらか一方を選ぶ二者択一の関係にあり、一方が **direct evidence** による情報(話し手が直接見たり聞いたりした情報)、もう一方が **indirect evidence** による情報(それ以外の情報)を表すと考えられる。

ところで、直接見たり聞いたりした情報か、それ以外の情報かということ、「そうだ」「だろう」「ようだ」「らしい」等の認識のモダリティが思い出される。仁田他編(2014:631)によると、標準語の「そうだ」は「第三者から得た情報であるという情報の仕入れ方」を、「だろう」は「事態成立を不確かさを有するものとして、話し手の想像・思考の中で捉えたこと」を、「ようだ」「らしい」は「事態が周りに存在している兆候・証左から引き出されたものであること」を表すという。「そうだ」は「第三者から得た情報」を表す点で **indirect evidence** 的な色彩を帯びているが、「だろう」は **evidence** を問題としていない。また、「ようだ」「らしい」は **direct evidence** 的である。このように、標準語ではエビデンシャリティが推量表現とさまざまな強さでオーバーラップしている。

では、与論方言のエビデンシャリティは、認識的モダリティとどのような関係にあるのだろうか。まず、与論方言には上記の2種類の終止形の他に認識的モダリティを表すテュン(伝聞)、ラ、ゲーラ(推量)、シャミ、ラシャミ(予想)、ギサイ(様態)等の形式が存在する。たとえば、(13)のシチャンテュンはシチャン(「した」の **indirect evidence** 形式)にテュンが付いたもの(cf.「した」の **direct evidence** 形式はシュータン)、(14)のキュッシャミ、(15)のキュンゲーラは「来る」の **indirect evidence** 形式にシャミ、ゲーラが付いたもの(cf.「来る」の **direct evidence** 形式はキュイ。非過去形のエビデンシャリティについては、次節で述べる)、(16)のイキューラは「行く」の連用形イキにフラ(居ら)が付いたもの、(17)のキーギサイは「来る」の連用形にギサイが付いたものである。

- (13) 太郎ヤ サッカー大会ノンティ 優勝シチャンテュン。(伝聞)
 太郎は サッカー大会に 優勝したそうだ。(菊 2007: 84)
- (14) アッチャーヤ 太郎ガ アシビンヤ キュッシャミ。(自分の予想)
 あしたは 太郎が 遊びに 来るだろう。(同: 156)
- (15) アッチャー 太郎ターガ アシビンヤ キュンゲーラ。(推量)
 あした 太郎たちが 遊びに 来るかな。(同: 157)

(16) 東京カチャー ウラン マージ イキュー^ラヤー。(推量)

東京には 君も 一緒に 行くだろう?(同: 133)

(17) 来週ヤ 東京カラ 太郎ガ キーギサイ。(様態)

来週は 東京から 太郎が 来るらしい。(同: 26)

このように、与論方言ではエビデンシャリティと推量表現が形態として独立しており、一文中に両者が共起することがある。それに対して、標準語ではエビデンシャリティ専用の形式がない。そのため、与論方言を標準語に訳す場合、(8a), (9a) では「掃きおった／掃いた」「買いおった／買った」のように、direct evidence (過去) を「おった」で、indirect evidence (過去) を「た」で訳している。ただし、(10) では a から d まですべて「間に合った」としか訳すことができず、direct evidence と indirect evidence を訳し分けることができない。

与論方言の direct evidence を「おった」で代用させることが可能だとすると、与論方言においてエビデンシャリティとアスペクトがどのような関係になっているのかが気になる。与論方言の direct evidence の形は、実際、「し+をる」に由来している。「し+をる(ヨル)」は、西日本方言ではアスペクト(進行相)を表す。与論方言の「し+をる」が direct evidence を表すとすると、与論方言ではアスペクト(進行相)はどのような形で表されるのだろうか。それは「して+をる」である。与論方言のエビデンシャリティとアスペクト・テンスの関係を詳しく論じた工藤他(2007)、工藤(2014)によると、進行相にも direct evidence と indirect evidence の両方があるという。つまり、エビデンシャリティはアスペクトとも異なる形態で示される。これらを整理すると、次の表のようになる。

表1 与論方言の direct evidence, indirect evidence, アスペクト形式

テンス	相	evidentiality	「掃く」	「飲む」	「する」
非過去	完成相	direct evidence	ポーキューイ	ヌミュイ	シュイ
		indirect evidence	ポーキュン	ヌミュン	シュン
	進行相	direct evidence	ポーチュイ	ヌドゥイ	シチュイ
		indirect evidence	ポーチュン	ヌドゥン	シチュン
過去	完成相	direct evidence	ポーキュータン*	ヌミュータン*	シュータン*
		indirect evidence	ポーチャン	ヌダン	シチャン
	進行相	direct evidence	ポーキュータン*	ヌミュータン*	シュータン*
		indirect evidence	ポーチュタン	ヌドゥタン	シチュタン

* 完成相過去の direct evidence と進行相過去の direct evidence は同じ形になる。工藤他(2007)には「numju:tan は・・・動作の進行を目撃した場合でも、動作全体を目撃した場合でもよい」とある。

以上のように、与論方言の2種類の過去形式は、認識的モダリティともアスペクトとも異なるカテゴリー、すなわちエビデンシャルティを表していると言うことができる¹⁾。

3.2 非過去表現に現れる2種類の形

与論方言では、非過去形にも *-i* 形と *-N* 形の2種類の形式がある。『与論の言葉 (ユンヌフトゥバ) で話そう (2)』によると、この2つは同じ文脈で使うことができ *-i* 形が客観的・説明的な表現、*-N* 形が主観的な表現だという。

(18) タローヤ イダガ。

太郎 は どこ？

アリヤー ヘヤノンティ シュクダイ {シュイ/シュン}。

彼は 部屋で 宿題(を) しおる。(菊 2007: 2)

(19) 優勝候補の A チームと万年最下位の B チームが対戦するのを聞いて

A チームヌ ハタナージ {ハチュイ/ハチュン}。

A チームが 必ず 勝つ (同: 3)

しかし、先に引用した (6) や次の (20) では、*-N* 形を使うことができない。また、話し手に起きている身体感覚の説明には *-i* 形が使われる (21)。これらは発話時において話し手がその動作を直接見たり聞いたり感じたりした事態を表す。このような文脈では *-i* 形しか使えない。

(6) (再掲) 前方から太郎が歩いてくるのを見て

アッ アマカラ タローガ {キュイ/*キユン}。

あっ 向こうから 太郎が 来る。(菊 2007: 4)

(20) 木陰で休んでいるとき、蟬の声に気付いて

アッ アシャシャヌ {ナキュイ/*ナキユン}。

あっ 蟬が 鳴く (鳴きおる)。 (同: 4)

(21) ワタヌ {ヤミュイ/*ヤミュン}。(話し手の身に起きている感覚の説明)

腹が 痛む。(同: 3)

先の (18), (19) で2つの語形が使えるのは、(18) では「太郎が部屋で勉強している」姿を直接見て回答する場合 (シュイ) と、直接は見ずに知識により回答する場合 (シュン) の2とおりの回答があり得るためだと思われる。また、(19) の「勝つ」は未来に発生する事態であって、発話時点では直接見ることができない。そのような場合には、*-i* 形と *-N* 形の *evidential* な対立が中和するのだと考えられる。

以上から、与論方言では非過去表現でも *direct evidence* と *indirect evidence* の違いが *-i* 形と *-N* 形によって区別されていると言うことができる。

3.3 質問文に現れる2種類の形

過去表現, 非過去表現に表れる2種類の形式は, *direct evidence* と *indirect evidence* に当たると考えてよさそうである。ここでは, それを補強する資料として, 2種類の形式が質問文に使われた場合を見てみよう。

- (22) タローヤ ヌー シュイガ。 > ヘヤノンティ ベンキョーシュイ。
太郎 何(を)しているか。部屋で 勉強している。(菊 2007: 155)
- (23) タローヤ 日曜日ンヤ ヤーヌタシキナガ シュイイー。 > シュイダー。
太郎は 日曜日には 家事手伝いなど しおるか。 しおる (同: 155)
- (24) タローヤ イチ キュンガ。 > アッチャー キュン。
太郎は いつ 来るの。 明日 来る。 (同: 155)
- (25) ユフイヤ ヌー コレンガ。
夕食は 何 食べる? (同: 155)
- (26) タロー ウロー アッチャー トショカンカティ イキュンミー。
太郎 君は 明日 図書館に 行く? (同: 154)

(22), (23) は発話時における太郎の動作に関する質問, (24) は不定時, (25), (26) は未来における聞き手や太郎の動作に関する質問で, (22), (23) では *-i* 形 (*direct evidence*) が, (24), (25), (26) では *-N* 形 (*indirect evidence*) が使われている。(22), (23) では, 聞き手が太郎の事態について *direct evidence* を持っているという前提で質問しているので, *-i* 形 (*direct evidence*) が使われている。一方, 未来に生じる事態については, 話し手も聞き手も *direct evidence* を持っていないため, (24), (25), (26) では *-N* 形 (*indirect evidence*) が使われる。

3.4 主語が一人称の場合

主語が一人称の場合, *-N* 形 (*indirect evidence*) による情報を表す形式が使われることは, 先に述べたとおりである。次の例でも *-i* 形ではなく, *-N* 形が使われる。

- (27) a. ウロー シュクダイヤ ナラチャミー。
君は 宿題 は 済んだのか。
b. (私は) ナマカラ {*シュイ。 / シュン。}
これから する。(菊 2007: 2)

ただし, 未来に生じる事態に対しては *-i* 形 (*direct evidence*) が使われることがある (28)。前節の (18), (24), (25), (26) と同じように, 未来の事態に関しては, *evidential* な対立が中和するためだと考えられる。

- (28) a. ウロー シュクダイヤ シランヌイ。
君は 宿題 は しないのか。

- b. (私は) ナマカラ シュイヨー。
これから する よ。(同: 2)

3.5 形容詞に現れる2種類の形

形容詞の言い切り形にも *-i* 形と *-N* 形の2種類がある。『与論の言葉で話そう (4) 形容詞 助詞 表現意図』(2014) から *-i* 形と *-N* 形の例を引用する。

- (29) a. 会社に遅れそうになったので朝食を取らずに出勤し、勤務中、ひもじい思いをした。翌日、同僚に「やっぱり朝食を食べないとお腹がすく」と言う → ヨーシャイ
b. 朝食を食べずに登校しようとする子どもに親が「食べないとお腹がすく」と言う → ヨーシャン (菊 2014: 42)
- (30) a. 与論生まれの太郎が南太平洋の島へバカンスに行きました。その海はとてもきれいでした。滞在中に与論の家族から電話があり「その海はどう?」と聞かれたので、「とてもきれいだ」と答える → チュラサイ
b. 与論生まれの太郎が南太平洋の島へバカンスに行きました。現地の人から「与論の海はきれいか」と聞かれて「とてもきれいだ」と答える → チュラサン (同: 42-43)
- (31) a. 友人が「友子が作ったパイナップル漬けを買って食べたが美味しかった」と言ったのを受けて「ほんとだね。私もよく買って食べている。彼女のパイナップル漬けは美味しい」と同調する → マサイ
b. 友子はパイナップルの漬け物を製造・販売しています。お客さんに「私の作ったパイナップル漬けは美味しい。買って下さい」と言う → マサン

(29a) は話し手が発話時に感じている自身の状態, (30a) は話し手がそのときに見て感じた海の状態, (31a) は以前に話し手が感じたことをそのまま伝える表現である。それに対し (29b) は未来に起きるであろう状態, あるいは一般的に起きる状態, (30b) は発話時には見ていないが, 過去の認識に基づく恒常的な海の状態, (31b) は友子が作るパイナップル漬けの恒常的な性質を伝える表現である。菊 (2014) によると *-i* 形は「言った言葉に責任を負わない感じがある」, *-N* 形は「言った言葉に責任を置く感じがある」という。このような感じは, *-i* 形が一時的な状態を表現するのに対し, *-N* 形が恒常的な状態を表現するところから生じるのであろう。形容詞ではエビデンシャリティ形式が一時的な状態と恒常的な状態 (レアリティ) を表している²⁾。

4. 奄美大島龍郷町方言のメノマエ性

奄美大島の方言のエビデンシャリティについては, 松本 (1996) に奄美大島龍郷町瀬留方言を資料とした詳細な分析がある。松本 (1996) ではエビデンシャリティではなく, メノマエ性という語が使われている。メノマエ性は次のように定義される。

さまざまなすがたで, ココに, イマ, アクチュアルにあらわれているデキゴトと, そ

れをハナシテが目撃していることを、ある文法的なかたちに表現してつたえているとき、そこにいいあらわされている意味的な内容をメノマエ性といっておく。(松本 1996:77)

具体的な内容は、次のとおりである。瀬留方言の非過去形には、「飲む」を例にとると m 語尾由来形の numjuN とヲリ形 numjuri の 2 つがあり、ヲリ形 numjuri は、ハナシテがいまメノマエにしている一回かぎりの個別的なデキゴトをになう (p.78)。デキゴトを表す自動詞文においてヲリ形非過去形がメノマエ性をにないやすい (32, 33) が、他動詞文でも第三者のうごきをさしだすときにはヲリ形非過去形が使われることがある (34) (p.81)。

(32) tiNbikjarinu hi?karjuri. いなびかりがひかっている。

(33) basinu kju:ri. バスがくる。

(34) usinu mizi numjurija:. うしがみずをのんでいるねえ。

生理現象については、ハナシテ自身のこともいえるが、そのばあいでも、感覚点などをメノマエにしている (p.80)。

(35) aita, jamjuri. — da:nu jamjuri. — haguinu jamjuri.

あいた、いたい。—どこがいたいの。 — あしがいたい。

上の例を見ると、瀬留方言のヲリ形は与論方言の *direct evidence* の形 (-i 形) とほとんど同じ使われ方をしている。生理現象のときに話し手自身のことをメノマエ性で表現するのも、与論方言の (21) ワタヌ ヤミュイ (腹が痛む) が *direct evidence* の形 (-i 形) であるのと同じである。

過去形については、松本 (1996) ではもっぱらシタ過去のシタリ形 nudari が取り上げられていて、シヨッタ過去の numjutaN が取り上げられていないので与論方言との比較ができないが、シタリ過去形を述語とする文は、過去におこったデキゴトがそのまま、あるいはそれにもとづく形跡、痕跡が現在もメノマエにあらわれていること (p.82)、シテの動作の結果がはなしてのメノマエにあること (p.89) を表すという。

5. 奄美大島名瀬方言のエビデンシャリテイ

奄美市名瀬方言にも 2 種類の終止形がある。三石 (1993) によると、名瀬方言の言い切り形には「活用語尾が ~ri のものと ~η のものとの二形があり」、「~ri は客観的に根拠のある事態に対する断定を表現するのに対して、~η は話し手の感動を表現する」(p.35) という。(36a), (37a), (38a) が ~ri 形, (36b), (37b), (38b) が ~η 形の例である。

(36) a. kju:ja ?aminu φururi (今日は雨が降る)

b. kafigari ?aminu φuruη (こんなにまで雨が降るねえ)

- (37) a. kazenu ɸuttʃuri (風が吹く)
 b. kaʃigari kadzenu ɸuttʃun (こんなにまで風が吹いてるねえ)
- (38) a. ʔaŋ tsuja ɕigaɕiŋ noro ʔuruuri (あの人は毎日布を織る)
 b. ʔaŋ tsuja korasa noro ʔuruun (あの人はきれいに布を織るねえ)

三石 (1992) のいう客観的な根拠とは、話し手が直接見たり聞いたりしたことに限らない。名瀬方言の～ri 形は、与論方言の～i 形や龍郷町瀬留方言のヲリ形とは同じではないようである。また、～ŋ 形が「話し手の感動を表現する」とすると、名瀬方言の～ŋ 形は、エビデンシャルティというよりも mirativity (the marking of unexpected information, Scott 1997) と考える方がよいかもかもしれない。

6. 九州方言のアスペクトとエビデンシャルティ

ここまで、与論方言では direct evidence と indirect evidence を表す2つの形式が対立していることを見てきた。先に述べたように、標準語にはエビデンシャルティを表す形式が存在せず、本土方言の多くもエビデンシャルティを表す形式を持っていないが、与論方言の direct evidence が「し+をる」に由来するとすると、あるいは、西日本方言の進行相のヨル（「し+をる」に由来）にもエビデンシャルティの要素があるかもしれない、という疑問が湧いてくる。エビデンシャルティとアスペクト・テンスはオーバーラップすることが指摘されている (*The Oxford Handbook of Tense and Aspect*)。

周知のように、西日本方言ではアスペクトが「～ル/～ヨル/～トル」の3項対立を示す(表2)。このような方言では、動詞の種類(動作か変化か)に限らず、ほとんどの動詞で進行相と結果相の表現を作ることができる(表3)。

表2 本土方言のアスペクト表現の地域差

	完成相	進行相	結果相
東日本方言	読ム	読ンデイル	
西日本方言	読ム	読ミヨル	読ンドル

表3 西日本方言のアスペクト表現

	完成相 ～ル	進行相 ～ヨル	結果相 ～トル
動作動詞	読ム	読ミヨル	読ンドル
変化動詞	死ヌ	死ニヨル	死ンドル

ただし、動詞によっては、結果相の～トルが進行相の～ヨルの領域へ意味を拡大する場合がある。福岡県北九州市方言(筆者(1955年生)の内省)では、「泣く、鳴る、降る」等の動作を表す自動詞に～トルの意味拡大が見られる(表4)。

表4 福岡県北九州市方言のアスペクト表現

動詞の種類	自他	完成相	進行相	結果相
動作動詞	自動詞	泣ク	泣キヨル	泣イトル
	他動詞	読ム	読ミヨル	読ンドル
変化動詞	自動詞	死ヌ	死ニヨル	死ンドル
	他動詞	開ケル	開ケヨル	開ケトル

～トルの意味が拡大すると、「泣く、鳴る、降る」等では～ヨル・～トルの両方が進行相を表すようになる。ただし、意味がまったく同じというわけではない。あくまで比較の問題ではあるが、～トルに比べて～ヨルの方に *direct evidence* 的な性質が強く現れる場合がある。たとえば、(39a), (40a) では～トルよりも～ヨルの方が自然である。ただし、～トルが使えないというわけではない。それに対して、(39b), (40b) では～ヨル、～トルが同くらい自然である。

- (39) a. 目の前で太郎（あかちゃん）が泣いているのを見て報告するとき
タローチャンガ {ナキヨルヨ/? ナイトルヨ}。
太郎ちゃんが 泣いているよ。
- b. 鳥の声がどこからか聞こえる
ドッカデ トリガ {ナキヨルヨ/ナイトルヨ}。
どこかで 鳥が 鳴いているよ。
- (40) a. 自分の部屋の目覚まし時計を止めたのに音が止まらない
マダ {ナリヨル/? ナットル}
まだ 鳴っている。
- b. どこかでサイレンがずっと鳴り続けている
マダ {ナリヨル/ナットル}
まだ 鳴っている。

あくまで比較した場合のことではあるが、九州方言の「し+をる」にも *direct evidence* の意味が見られる。

7. 古典語の推量表現

direct evidence と *indirect evidence* の区別は、古典語には見られないのだろうか。奄美方言のエビデンシャリティがどのようにして生まれたかを考える際に、古典語にエビデンシャリティを表す形式があったかどうかは、重要である。仁田他編 (2014) によると、「〈直接的エビデンシャリティー〉形式が古語に存在しないわけではなく、視覚に基づくことを表わす助辞メリ、聴覚に基づくことを表わす終止形接続の助辞ナリがある」（鈴木泰）という。

古典語には推量を表す助動詞が非常に多い（む、むず、けむ、らむ、なり、めり、らし、まし、べし）が、これらの中、「なり」「めり」「らし」は次のような意味を表すと言われる。

- (41) なり『なり』の『な』は『鳴く』『鳴す』『鳴る』のナと同語源であろう。「物が見えなくても音響が聞こえることを言う」（『岩波古語辞典』：1439）
- (42) むり「起源は、おそらく「見あり」であろう。「見」とは、動詞「見る」の連用名詞形である」「平安時代初期の『むり』の用例は、思考による推量を表すものではなく、視覚によって見えることを『...しているように見える』と表現したものが多」（同：1436）
- (43) 「らし」は「客観的に確定された事実があり、その事実が何であるか、何故であるかを推量するものである」（同：1438）

なお、「なり」「むり」の語源については、春日（1957）の次のような説もある。

- (44) 「なり」は <中略> どこまでも感覚的に実際何かの音が聞こえている表現である。<中略> 「音が... ..と聞こえる」、即ち「と」で受ける副詞を伴う「音聞こゆ」に近いものと考えたい。（春日 1957：46）
- (45) 「むり」は「みあり」の融合であると説明するよりも視覚的なメという語根にラ変の活用語尾がついたものと説明しておきたいのである。（同：48）
- (46) 「なり」は聴覚による音声の現象的表現、「むり」は視覚による対象の判断的表現の傾向が強い。（同：48）

いずれにしても、「なり」は音響が聞こえることを、「むり」は視覚による推量であることを、「らし」は事実に基づく推量であることを表していた。以下にいくつか例をあげておこう。

「なり」

- (47) 雁くればはぎは散りぬとさをしかの鳴くなる声もうらぶれにけり（万葉集 244）
- (48) 萩波の散らまく惜しみほととぎす今城の岳を鳴きて超ゆなり（万葉集 1944）
- (49) 秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはむ（古今集巻四 202）

「むり」

- (50) 簾の少し開きたるより黒みたるもの見ゆれば、のりたかが居たるなむりとて見も入れで（枕草子 47）
- (51) 朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なむり（竹取物語）

「らし」

- (52) 春過ぎて夏来たるらし白たへの衣ほしたり天の香具山（万葉集 28）
- (53) ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたきつ瀬おとまさるなり（古今集巻 6 冬歌 319）
- (54) いつのまにうつろふ色のつきぬらんきみがさとはには春なかるらし（伊勢物語 20）

(47) では、姿が見えないが「さをしかの声」が聞こえる、(48) では「ほととぎすの声」が聞こえる、(49) では「まつ虫の声」が聞こえることを「なり」が表している。また、(50)

では「黒みたるもの見ゆ（黒っぽいもの（着物）が見えた）」を根拠として「のりたかが居たる（則隆が居た）」という推量が行われている。同じように、(51)では「朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする（私が毎朝毎晩見ている竹の中にいらっしゃる）」を根拠として「子になり給ふべき人なり」という推量が、(52)では「白たへの衣ほしたり（衣が干してある）」を根拠として「春過ぎて夏来たる」という推量が、(53)では「たきつ瀬おとまさる（滝の瀬の音が大きくなった）」を根拠として「ふる雪はかつぞけぬ」という推量が、(54)では「うつろふ色のつきぬ（あせていく花の色（あなたの恋心）が尽きてしまった）」を根拠として「きみがさとは春なかる」という推量が行われている。

注

- 1 与論方言の2種類の終止形については、山田（1977）に「現在直接の目の前において動作の進行継続を表している」、「自分（話者）の目の前にいないで、別のところで本を読んでいると推測する場合とか、目の前にいてもその時点以後の場合に「読むだろう」という推測をする時に用いられる」とある。
- 2 松本（1996）に、「メノマエ性は、モーダルにはリアルな現実にかかわり、テンス＝アスペクト的には現在の状態にかかわってあらわれるなど、いくつかの文法的なカテゴリーの複合としてなりたっている」（松本 1996:77）とある。松本（1996）のメノマエ性はエビデンシャリティに類似する概念として提示されている。

参考文献

- 春日和男（1957）「聴覚および視覚による表現（上）－「なり」と「めり」との関係について－」『文学研究』57, pp.41-57.
- 春日和男（1961）「聴覚および視覚による表現（下）－「なり」と「めり」の消長について－」『文学研究』60, pp.49-70.
- 菊秀史（2007）『与論の言葉で話そう2 動詞を覚えよう』与論民俗村
- 菊秀史（2014）『与論の言葉で話そう4 形容詞 助詞 表現意図』与論民俗村
- 工藤真由美（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて－』ひつじ書房
- 工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美（2007）「与論方言動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティ」『国語と国文学』84・3, pp.53-68.
- 工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 仁田義雄・尾上圭介・影山太郎・鈴木泰・木村新次郎・杉本武編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 服部四郎（1958）「奄美大島諸鈍方言の動詞・形容詞終止形の意義素」『言語学の方法』所収, pp.401-412.
- 松本泰丈（1973）「奄美諸島加計呂麻島諸鈍方言の動詞の語形変化おぼえがき」学習院女子短期大学『国語国文論集』2, pp.1-19.
- 松本泰丈（1995）「諸鈍方言の動詞の終止形おぼえがき」『琉球の方言』18・19 合併号, pp.164-180.
- 松本泰丈（1996）「奄美大島北部方言のメノマエ性－龍郷町瀬留」『日本語文法の諸問題－

高橋太郎先生古希記念論文集』ひつじ書房。

三石泰子 (1993) 『名瀬の方言』秋山書店

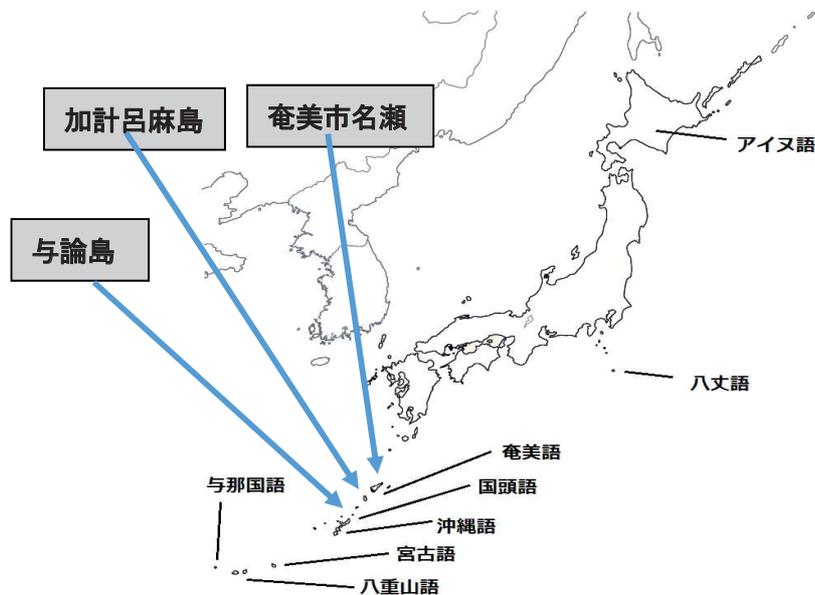
山田実 (1979) 『琉球語動詞の形態論的構造』国書刊行会

Alexandra Y. Aikhenvald (2003) "Evidentiality in typological perspective" *Studies in Evidentiality* Edited by A. Y. Aikhenvald. & R.M.W. Dixon. "Typological Studies in Language 54" John Benjamins publishing Co.

Aikhenvald Y. Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. New York: Oxford University Press.

Delancey, Scott (1997). "Mirativity: the grammatical marking of unexpected information," *Linguistic Typology*. 1: 33–52

Ferdinand de Haan (2012) "Evidentiality and Mirativity", *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*, Edited by Robert I. Binnick, Online Publication.



付録図 与論島，加計呂麻島，奄美大島名瀬の位置

付記

本稿は、2018年1月25日に開催された CAAS&NINJAL 合同セミナーにおいて発表した内容をもとに作成したものである。発表の場を与えてくださった東京外国語大学国際日本学研究院に深く感謝申し上げますとともに、席上、ご質問やご意見をお寄せくださった方々に御礼申し上げます。なお、この研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の掃滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。